
今宵、星の降る丘で

依田一馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今宵、星の降る丘で

【Nコード】

N7480M

【作者名】

依田一馬

【あらすじ】

「君に見せたいものがあるんだ」

僕は、そう言った彼によって『星狩り』へと連れて行かれる。ふたりで見上げた空に瞬く星は、今にもこぼれ落ちてしまいそうで

「君に見せたいものがあるんだ」

唐突に、彼はそう言った。

その声色はいつものように優しい。むしろいつもそのような調子で話しかけてくるものだから、このときの彼が一体何を考えているかは僕には理解できなかった。そもそも、彼がこうやって僕のことを呼び出すのは非常によくあることで、その度に僕は「はい」と頷いて彼の後ろについていく。これは最早僕の日常と言ってもいいだろう。

彼は、僕がその誘いを断ることができないということをよく知っているようだった。そしてまた彼自身、自分の頼みごとは何かと無理があるということも熟知していた。だからそういうときは、きまつて彼は優しい声で、苦笑するように頬をこわばらせながら言うのである。

彼のことをよく観察している僕だが、正直なところ彼の本性そのものはよく分からない。今の段階で明白なのは、彼はとても多趣味だということだけだ。現に、今彼に頼まれていることもその一部なのである。

「今日は一体、どうしたんです？」

彼は僕の肯定のサインを確認すると、満足そうにいそいそと準備し始める。

ブラインドから差し込んでくる横長の夕焼けがベージュの壁紙を焦がした。そして、彼がその身にまとう白いシャツの色すらも、朱色の絵具がぱつと画用紙に広がるように染まってゆく。

一面が、夕焼けの朱。

綺麗だ、と僕は思った。

こうやって一面の朱に包まれて、そして僕自身もこれに染まることのできるなら、どんなにいいだろう。夏の夕空の一部になるよう

な気がして、とても素敵ではなからうか。

「……その、君の意識は今、どこにいる？」

彼のその一言に、僕ははっとした。彼が、ぼんやりしていた僕をじっと見つめている。褐色の瞳は僕と朱を映して、にじんで混ざり合っていた。僕は首を横に振る。

「すみません」

「君のことだから、どうせぼうつとしていたんだろうよ。……ああ、そのこの棚から、アルミのカップをふたつ出してくれないか。君とわたしのものだ」

言われた通りに、棚からアルミのカップ　キャンプなど、野外で使うような簡素なものである　を取り出し、積もった埃を洗い流すべく流しに持っていった。

蛇口をひねる。

水道水が噴き出す、音。

横目で彼を観察すると、彼は小さな三脚とカメラ、それから中盤フィルムをいくつか準備していた。それからレジャー・シートを一枚と、薄手の毛布を二枚。思い付きのキャンプには、荷物が少ない。

「できるなら、その引き出しからティー・バッグを持ってきてくれると尚良い」

つまりは持ってこいという意味だ。僕は引き出しを開けると、彼が好む香りの強いアルグレイのパックを取り出した。

小さな袋にそれらを詰め、彼の元へ持っていくと、彼はふつと頬を緩ませながら礼を言った。その頃には大方の準備はできていたように、先程までしぼんでいた大きいリュックがぱんぱんに膨れ上がっていた。

「ずいぶん張り切っていますね？」

「そうだろう。今日は、『星狩り』を行うのだ」

その一言で、ああ、と僕は納得した。

彼の趣味の一つである写真撮影にもいろいろ種類があり、今日は

その中でもかなり特殊な部類である「星の撮影」に乗り出すつもりらしい。彼はそのためにしばしば街灯のない高原などに向いては、一晩中カメラを宙に向けている。そのことを、彼は「星狩り」と称していた。何度か僕も連れて行ってもらったことがあるが、あれはかなりの忍耐力を要する。三脚を使うにしても、結局はその間ずっと外にいないてはならない。それに夏場といえども深夜になればそれなりに気温も下がる。すなわち、体力との勝負なのである。

「夏の空は綺麗だ。もちろん冬の空の方がわたしは好きだが、それと同じくらい、夏の空も愛している」

彼の心はすでにどこか別の場所へ向けられている。僕の存在は少しだけ、彼の中の比率としては少ない方に割り当てられてしまった。非常に複雑な心境である。

日は次第に傾き、燃えるような炎の朱から、群青に変わりつつある。この中間色であるミルクを垂らした紫と鮮やかな朱鷺色が、僕はとても好きだ。

もうじきあたりは闇に包まれる。そうしたら、僕と彼のふたりだけの世界になる。

「さあ、行こうか。盛大に狩るぞ」

彼は荷物を背負う。それを後ろから追いかけるように、僕は車の鍵とともに部屋を出たのだった。

彼のお気に入りポイント、というのはいくつかあり、今日はその中でも特に気に入っているという丘にやってきた。車は下に置いてきた。だから頂上までは、徒歩でゆっくりと登ることになる。

彼はその年齢の割にしゃきしゃきと動く。こういう趣味が高じてか、足腰だけは日頃から鍛えられているようである。リュックからぶらさがる銀のカップが左右に揺れる。

案の定、丘の空気はひんやりとしていた。僕は思わず一度くしゃみし、ぶるりと背筋を震わせた。迂闊だった、ここに来ると分かっ

ていたならば、もつときちんとした格好をしてきたのに。

「上着、着るかい？」

彼が坂の上の方からそのように声を掛けた。彼の顔は、月の光に照らされて薄氷色アイス・ブルーとなっていた。しかし声色はとてもあたたかい、非常に優しいものである。

一拍置いて、僕はそれを断った。

「だってそれはあなたが着るものでしょう？」

あなたの服は僕には大きすぎるのです、と付け加えると、彼は「それもそうだ」と笑った。そういう風に野生じみた表情をする彼は、とても珍しい。僕は貴重なものを見てしまった、と心を躍らせる。その後も僕と彼はゆっくりと丘を登り、やっと開けたところに出た。

空がこんなに近い。手を伸ばせば、雲なんか簡単に鷲掴みできそうだ。星はきらきらと瞬いて、その重みから今にもこぼれ落ちてしまいそうだった。彼が気に入っているのもよく分かる。街中では、こんな場所は滅多にないのだ。

彼が荷物の中からレジャー・シートを引っ張り出し、草むらの上にそつと敷いた。そしてその上に重たいリュックを置く。

「適当に座つて、押さえていてくれないか」

僕はそのために呼んだのですか、と尋ねると、彼は曖昧に笑った。「違つよ。まあ、確かにそういう意味もあったかもしれないが。……」

「ひとりじゃあ、寂しいだろう」

そして三脚を組み始める。白のそれは、宙そらに向かって広げられた。まるで、閃光のようである。広がった白い矢の消失点のちょうど真上に、安っこいカメラが鎮座した。

「こんなに広い所で、自分だけが存在していると感じたら泣きたくなるだろう。ああ、こんなに世界は広いのに、自分はその中のちっぽけな『いち』なのだ。そう考えると、わたしはね。どうしようもなく消えてしまいたくなるのだよ。わたしただひとり、消えてしまっても誰も気づかない。世界は縷々と流れ続ける。ただそれだ

けのことなのに、わたしという存在価値が、急に無と等しくなってしまう気がする」

だから君を呼んだのだ、と彼はおもむろに視線を僕に向けた。

「わたしという形を、この場所に留めておくために」

僕はうつむいて、彼の荷物の中にあつた毛布にくるまる。

たまにこのひとは、こういう突拍子もないことを口にするのだ。

そして、それが僕に対して強力な武器になるということを知らない。このひとは、こうやって僕を鋭利なナイフで切り刻んでいくのである。その、優しい顔で。

残酷なひとだ、と、時々思う。

しかしその残酷さにすがりつくのは、まぎれもない僕なのだ。不思議だろう？ 離れようと思えばいつでも離れられるのに、それでもなぜか近くにいたいと思う。彼にはそう思わせる魔力があつた。おそらく僕は、彼の放つ言葉の武器が好きなのだろう。そして、それによつて傷ついて、甘い痛みに耐えるのが実はとんでもなく好きなのだろう。我ながらとても変なやつだ。

「寒いかい？」

彼はそつと尋ねてくる。まるで壊れものを扱つかのような、やわやわとした発音だつた。僕がうつむいたまま毛布にくるまるものだから、心配したのだろう。

僕は何も言わず、ただ首を横に振つた。そうか、と彼は笑い、カメラのレンズを真上に向けた。そして、シャッターを開けっ放しにしたまま特別な道具で固定した。

しばらく無言だつた。風の音がまるで音楽のように澄んでいたのだ、僕たちはそれにずっと耳を傾けていたのだ。ワルツのように、角のないなめらかな音楽だつた。

「星が降る」

ふと、彼が突然呟いた。

僕は顔を動かさず、彼の言葉をその耳で聞いた。

「星が降る。……うん。いい言葉だ」

「自己完結しないでください」

「だって君は関心がなさそうだから」

「べつに、関心が無い訳じゃありませんよ」

そうかい、と彼は呟いて、それから囁くように言った。僕のすぐ隣で。近くで。

「手を伸ばせば届きそうだ」

「……そうですね」

「欲しいと思わないかい？」

彼はそう言った。とてつもなく甘い言い方で。まるでそちらの世界に誘い込むかのように。彼の言葉には魔力がある。思わずうん、と首を縦に振ってしまいそうな、そういう類の魔力が。

「だってぐるぐるとずっと空を廻っていたら、ひとつくらい落ちてきそうじゃないか」

「その発想、いい大人がするものですか」

魔力を断ち切るためにそう言った。わざと冷たい声で。

「君は現実主義者かい？ 違うだろう。わたしに付き合ってくれているのだから」

「……悔しいから、そう言っているんです」

「ふうん。まあ、そういうことにしておこうかな……。よし、そろそろシャッターを閉めよう」

道具を外し、シャッターを閉じる。ダイヤルをゆっくりと回すと、次のまっさらなフィルムに装填されていく。しゅるしゅる、と乾いた音が風に混ざって、ついに止まった。

「もう一枚撮るよ」

彼はにこりと笑った。「次は、落ちてくるといいね。星」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7480m/>

今宵、星の降る丘で

2010年10月8日13時57分発行